

【 復活讃詞 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖 神 共 始

なきことばわがすくいのため
 言 吾 救 爲 に

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて
 童 貞 女 生 者 を 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼりしをしのびそのこ
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者 を

ふくかつせしめたまえばなり。
 復 活 給 え ば な り 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。

しととひとしくどうぎなるものちゅう
 使 徒 等 同 座 者 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 なる ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せい

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しょおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教 聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} セラフィムより讚榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 悉くの天軍より伏拝せられ、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} 萬物を無より有となし、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ ととき おい なんぢ せい} 人を爾の像と肖とに依りて造り、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 爾が諸の賜を以て之を飾り、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 罪を行ふ者を棄てずして、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 其救の爲に痛悔を立て、^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 此の時に於ても、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者となしし主宰よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 爾の仁慈を以て我等に臨み、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 我が靈と體とを聖にし、^{けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い なる か み、 せ い なる ゆ う き、 せ い なる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い なる か み、 せ い なる ゆ う き、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い なる か み、 せ い なる ゆ う き、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い なる じょう せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い なる じょう せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い なる か み、 せ い なる ゆ う
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第5調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

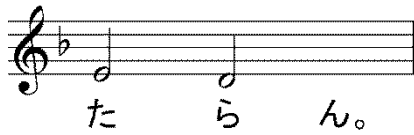
司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにいた
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにいた
 斯 世 永 遠 至



誦經) 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



【 使徒經 (アポストロス) 110 端 ロマ書 12 章 6 節～14 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、我等に與えられし恩寵に依りて、我等賜を獲ること齊しからざるが故に、

預言を得ば、信の度に依りて預言せよ。役事を得ば、役事に居れ、教うる者あらば、教えよ、

勧めを爲す者は勧めを爲せ、施す者は、朴直にして施せ、理むる者は心を竭くして理

めよ、矜恤を爲す者は、歡びて矜め。愛は偽なかるべし、惡を惡み、善を親め、

兄弟の愛を以て相愛し、禮儀を以て相譲れ。勤に怠る勿れ、神を熾せ、主に事

えよ。望を以て喜べ、患難に遇いて忍べ、祈禱に恒なれ、聖徒の需むる所に供せ

よ、務めて遠人を迎えよ。爾等を窘逐する者を祝福せよ、祝福して、詛う勿れ。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。愛には偽りがあつてはならない。惡は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。熱心で、うむことなく、靈に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろつてはならない。

司祭) 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ った} 主よ、我永く爾の慈憐を歌い、我が口を以て世に爾の眞實を傳えん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅざい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 29 端 9 章 1~8 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 彼の時イイス舟に登り、濟りて己の邑に來れり。視よ、癱瘋を患いて牀に臥せる者を彼に昇き來れる者あり、イイス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂えり、子よ、心を安んぜよ、爾の罪は爾に赦さる。時に或學士等己の衷に謂えり、彼は褻す言を言う。イイス其意を見て曰えり、爾等何ぞ心の中に惡しきことを懷う、蓋爾の罪赦さると言い、或は起きて行けと言うは、孰か易き、然れども爾等が人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(是に於て癱瘋の者に謂う、) 起きて、爾の牀をとりて、爾の家に往け、彼即起きて、牀を取りて、其家に往けり。民之を見て奇と爲し、是くの如き權を人に賜いし神を讚榮せり。

(比較用 口語訳) その時、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に歸られた。すると、人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた。すると、ある律法学者たちが心の中で言った、「この人は神を汚している」。イエスは彼らの考えを見抜いて、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす權威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言い、中風の者にむかって、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起

きあがり、家に帰って行った。群衆はそれを見て恐れ、こんな大きな権威を人にお与えになった神をあがめた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ